
ブルーバード

稲垣優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルーバード

【Nコード】

N5779H

【作者名】

稲垣優

【あらすじ】

幸せなんて、儚いものね。あなたという事が、幸せだ、なんて馬鹿みたいなこと、言わないけど。——私の幸せは、白だったみたい。

青い時

あなたは、幸せですか？

私は、幸せですか？

幸せを運ぶ青い鳥を、あなたは見たことがありますか？

残念ながら、私の青い鳥は墜落してしまったようなのです。

でも、それでも大丈夫。

私には、もう一羽。

青い鳥がついているから。

ハロー、ハロー。

あなたは泣いていますか？

もし、幸せでないのなら。

私の幸せを分けてあげます。

あなたから貰った幸せを、私は白くして返してあげたい。

青い空

私はまるで、巢立ちが出来ない小鳥のようだわ。

；

；

；

「青い鳥って見たことある？」

このときの彼の顔を、私は忘れる事ができるだろうか。

彼は、笑顔で。楽しいのか幸せなのか悲しいのか、私には良く分からない笑顔で笑っていた。

部屋には古い畳が敷き詰められていた。テーブルどころがちやぶ台一つ無い、私の実家の一室。今時珍しい、広くて平屋の和風な家だ。今の季節、クーラーも無いこんな家の、しかも一番日当たりがいい部屋で日向ぼっこなんて、死ぬほど暑いはずなのに、彼は気にせず太陽の光に当たる。まあ、今に始まった事じゃないけれど。

彼は、私の実家のこの場所を大変気に入っていた。暇があれば、必ず私を呼び出して実家へ行く。私が一人暮らしするアパートから実家まで、近いわけでもないのに。なんだかんだで彼と付き合って三年が経つのも、この場所のおかげかもしれない。

——その日は、雲なんて一つも無いくらいの、快晴で。

彼はそんな空を見上げてから。私へと話し掛けた。

「あるわけ無いでしょう、そんなの。それとも何？　悠は見たことあるの？」

「うん、あるよ」

「嘘つき」

私が冷たくそう言ったら、彼はほんとだよ、と更に食いついてくる。嘘ばかり。

あなたの言う事は嘘ばかりよ。一体、その笑顔でどれだけの女を騙してきたのかしら。

「ほんとだってば。由梨は夢が無いなあ」

「二十歳を過ぎてまで夢を追う女なんてイタイだけでしょ」

「そうかなあ。夢見がちな子って、結構好きだけど」

あなたの趣味になんて興味、無いわ。

どうせ、……どうせ、意味なんて、ないもの。

「それで。青い鳥がどうしたって？」

「ああ、うん。青い鳥の探し方を教えてあげようかな、って」

「探し方？　そんなのあるの？」

「うん、あるよ」

そんなのがあるなら、びっくりだ。

青い色の鳥がいないのは、世界の科学界も認めていることなのに、探し方があるなんて。

その探し方で、あなたは青い鳥を見たことがあるのかしら？

「紙とペンとはさみを用意して」

「その辺にあるわ」

そう言って、私はその辺を指差した。

彼は私たちが座る畳の上に、紙を置いてペンで何かを書き始める。

すぐくいびつな落書きを書き始める、悠。そして、その落書きの形にはさみで切って行く。

五分もせずに、それは完成した。

「ほら！」

「……何、その落書き」

「何って。鳥に決まってるじゃん」

「鳥？ そのいびつな丸が？」

「うわ、酷い、由梨」

悠はそう言って、私を隣りに呼んだ。

それだけでなく暑いの、日差しに当てられてますます暑くなったような気がした。

私の頬に、彼の髪が触る。くすぐったいわ。

「ほら、見て」

「見てるけど」

彼は、そのいびつな紙の鳥を頭上へと掲げた。
見ろと言われたので、私はそれを見る。
何の変哲も無い、白い紙で作られた手作りの鳥。

———嗚呼、でも、

「ほら、青い鳥発見！」

「え？ 何処に？」

どれだけ目を凝らしても、青い鳥は見つからない。
私はもう一度悠に何処、と尋ねる。
しかし、彼は此処に居るじゃん、というだけ。

「だから何処にいるの？」

「ほら、これが青い鳥だよ」

彼は紙の鳥を私に手渡す。
これ、が、青い鳥？

「どうみても白い鳥じゃない」
「これだけ見るとね。だけど、空にかざすと、たちまち青い鳥に大
変身———」

「しない！ 背景が青の白い鳥よ！」

「細かい事は言わない言わない。ほら、由梨に青い鳥をプレゼント」
「ただの子供の工作じゃない……」

呆れた。

こんな子供でも言わないような事をするために、私を付き合わせたのか。子供っぽいにもほどがある。

私は大人しくそれを受け取り、出口のちかくに置いてある棚の上に置いた。

「じゃ、由梨には幸せをプレゼントしたから、」

「白い鳥が幸せを運ぶなんて話、聞いたことないけどね」

「由梨は、もう大丈夫だね」

「――、？」

もう、大丈夫？ 何の、話？

私は言い表せない不安にかられる。

何で、何でそんなこと言うのよ。

やめてよ、なんだか、まるで、悠がいなくなるみたいじゃない。

そんなのやだよ、……………嫌、だから、

「―――そんな不安そうな顔するなって！ 俺は、どこにも行かない」

「……、ほんとう、？」

「ほんとほんと」

彼はいつもの笑顔で私を宥めた。

ああ、私はダメね。

彼に甘えてばかりで。

私はまるで、巣立ちが出来ない小鳥のようだわ。

；
；
；

その日は、雲なんて一つも無いくらいの、快晴で。

人の手によって空を飛ぶ、青で白の紙の鳥に見惚れてしまっていたから。

私は、つい、彼が嘘つきだったことを忘れてしまっていた。

青い海

彼へ、届け。

；

；

；

海の匂いは嫌いじゃない。

ねえ、あなたは私がそう言ったこと、覚えてくれているかな。
忘れているでしょうね。

どうせ、あなたなんか、女の言葉なんて一夜で忘れてしまっている
わね。

私の耳に届く波の音は、やけに私を落ち着かせた。

———私、なんでこんなに落ち着いてるんだろう？

「悠の、嘘つき」

一人ぼっちで海を眺め、私はぼつりと独り言を零す。
誰も聞いてない。

そう思うと、独り言も愚痴も、止まることはなかった。

「どこにもいかないって、言ったじゃない。嘘つきだわ。あなたは、本当に」

私は嘘が嫌いよ。

大嫌い、あなたが吐く嘘だって、本当は、大嫌いだった。
あなたは嘘を吐くのが好きなようだわ。

どこにもいかないって。

言って、くれたじゃない。

ねえ、……どこにいるのよ。

『借金取りに追われて。………一家心中ですって』

どこにいるのよ。

私、あなたの居場所、知らないわ。

……どこに行けば、会えるのよ、悠。

「……悠、どうして、あなたは何も——」

聞いたことがなかった。

彼の家が借金で困ってた、なんて。

ううん、家族の話すら出なかった。

尋ねても答えない。不自然には、思ってたけど。………思った、のよ。

訊いてはいけないことなんだ、とただ割り切っていたけれど。こういう、ことだったんだ。

悠、どうして私に何も相談してくれなかったの。

私だって、話を聞くくらいできるわ。

……そんなに、頼りなかったかな。

「——私は、頼りないね。私は、弱くて、甘ったれで、あなたに、頼りつきりで。——ごめんなさい」

こうなってから、少し、ね。

息が出来ないわ。

たまに、感傷に浸りたくなるの。

一人で日向ぼっこをしているとね、何故か折り紙が欲しくなるのよ。青い折り紙を、大量に買ったわ。

……、何に使うのかって。

そんなの、決まってるでしょう。

紙飛行機を、折るためよ。

「……残念ながら、飛べる鳥の折り方は分からなかったけど」

青いんだから、大丈夫よね。

少なくとも、白い鳥よりはましだわ。

私、悠に感化されたのかな。

あなたみたいに子供みたいな事、しようとしてる。

かばんにたくさん入っている紙飛行機を、私は取り出した。
そして、青い空に向かって、

ふわ、

頼りない、紙飛行機の青い鳥は、弱々しく飛んでゆく。

海に向かって。

空に向かって。

しかし、遠くの方で青い鳥は海へと沈んでしまった。
私は、もう一つ取り出し、もう一度投げる。

もう一度。

もう一度、

もう、いちど、

かばんの中が空っぽになった時。

心も一緒に、空っぽになっていた。

手に一つだけ残った紙飛行機を、つぶれないように握り締める。

結果なんて、分かりきっていたじゃないか。

何を悲しむのよ。

——いいえ、違うわ、分からない。もう一つ、残っているじゃない？

頭の中で麻薬のように囁く声。

私は理性が止める声を聞きながら、麻薬の声にひそりと答える。

——ええ、そうね。最後の一つが、残っているわ。

私は右手を上へと掲げ、ふわりと飛ぶ青い鳥を見ていた。

私の青い鳥よ。

彼へ、届け。

；

；

；

残念ね、悠。

私の青い鳥は渡り鳥じゃなかったみたいよ。

……………あなたのところで、飛んでいけそうにないわ。

青い幸

ねえ、私には、幸せしか見えないよ。

；

；

；

この部屋は、今日も日が当たっていた。

いつも、あなたはここに居たのね。

馬鹿じゃないの。こんな、クソ暑い場所に寝てるなんて。

……………死ぬほど、暑いわよ。

このままここに居れば死ねるかな、なんて馬鹿みたいなことを思っ
て、自嘲。

「…………あ、つい、」

しかし、こんなにあつい太陽も、下から見上げるように見れば、キ

ラキラとしているようにさえ見えた。

——太陽を直接見るなんて。目に、悪いわ。

そう言ったのは、誰だったか。

お母さん？

……違う、私だ。

悠に、私が言ったんだ。

丁度今の私と同じ格好をしている悠に、私が言った。
目に悪い、と。

すると悠は、俺目良いから大丈夫だよ、と言い返して来た。

ああ、じゃあ、私は彼ほど目が良くないから、太陽を見ていてはダメね。

そう思って、起き上がると、何故か部屋がガランとしているように感じた。

理由は分かりきっていたので、いつもの場所から紙を取り出そうとして、……迷った。

いつもの青い折り紙にしようか。

それとも、だたの白い紙にしようか。

迷った末、私は白い紙に手を伸ばす。

そしてペンを取り出して落書きのように書き始める。

うん、彼よりは上手く書けたんじゃないだろうか。

そして、その絵の通りはさみで切って行く。

出来上がったその紙を、私は空へとかざす。

ねえ、見てる？ 悠？

私、青い鳥を手に入れたよ。

しかも、二羽。

「悠、あなたは今どこに居る？」

空にいるかな。

それとも、私の隣り？

あなたのことだから、日本列島一周！　なんかもやってそうね。

私はね、たとえあの世でも、あなたが笑ってる事を祈ってるわ。

あなたの笑顔は、いつも嘘だったから。

嘘、嘘、嘘っぱち。

だからね、せめて、あの世では。

心の底から笑えている事を、願うわ。

手作りの青い鳥をかざしてみるの。

ねえ、私には、幸せしか見えないよ。

；

；

；

私に幸せをくれたあなたに、私も幸せをあげたいと思うのです。

二つ並んでる、白い、青い鳥をかざし。

あなたの名前を呟いてみたりするのです。

この幸せが、あなたにも、おすそわけ出来ますように。

青い鳥

私に幸せをくれたあなたへ。

ハロー、ハロー。

あなたは、今、何をしていますか？

幸せですか？

それとも、泣いていますか？

もしも泣いているのなら、私の幸せを分けてあげましょう。

私からあなたに会う事は出来ないから、あなたから来てくれると嬉しいわ。

私は、いつもの場所で、青い折り紙を空へ飛ばしながら待っている
ので。

あなたが来てくれたのなら、私は笑いかけてあげるから。

あなたが笑い返してくれると、私も満足かもしれない。

もうすぐ、夏が終わってしまいますね。

あなたが消えて、それでも季節はまわっていくのかと思うとすこし寂しいけれど、それでも私は頑張ろうと思います。

あなたが消えても、世界は廻る。

あなたがいない世界で、私はおばあちゃんになるまで、廻り続けようと思います。

一つだけわがままを言えば、わたしがおばあちゃんになって、

幸せな一生を終えて、お墓に入る時が来たら。

迎えにきて欲しいわ。

悠はずいぶんモテるから、新しい彼女が出来ているかもしれないわね。

それでも、もしも、私の事を覚えていてくれたならば。

少しでも良い。私に笑いかけてくれると、嬉しいわ。

来年の夏には、きっとこの折り紙は無くなっているわね。

その時のお墓参りには、この白い鳥を持っていくわ。

私があなたから貰った幸せを、少しでも返してあげたいの。

私は、今、幸せです。

あなたの幸せを願って

由梨

青い鳥（後書き）

このお話は、最初は短編にするお話でした。

けど、なんだか分けて書いた方がスッキリするかな、と思って長編に変更。

結果、私の初めての長編の完結作品になりました。

このお話を読んで、少しでもいいな、と思ってくださったら嬉しいです。

他にも連載している小説があるので、其方の方もよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779h/>

ブルーバード

2010年10月14日12時12分発行